

裡に敵陣地斜面を匍匐前進している時、上弦の月が中天に昇ってきたので月影の方へ月影の方へと移動した。

突入するのに軍刀の鞘が邪魔になるので再び軍刀を鞘に収めることはないだろうと思いつきその場に鞘を捨て、軽機の援護射撃のもとで、投げた手榴弾の爆発と同時に全員一斉に敵陣地に突入した。

その後、探しても鞘は見付からず拔身に雑巾をまいて持ち歩いた。

白鶴舗で来援の敵阻止の任務を終えたあと、敵が包囲中の衝陽城外の敵陣地を拒送患者として暗夜に乘じて敵中突破し、野戦病院へ九死に一生を得て到着し、約一カ月入院のち再び、足を引きずりながら第一線の中隊へ復帰した。

太平洋戦争従軍記

岐阜県 増田悦三

一 召集

昭和十九年八月二十五日朝、召集令状が来しました(三十一歳)。「九月二日午前八時名古屋陸軍病院へ出頭スベシ」と記されていました。

多くの出征軍人は各地の戦場で傷つき、あるいは無言の凱旋をしている。自分も生きては帰れないと覚悟を決めた。九月二日の入隊が一日早い応召者のため八月三十一日に合同で出征軍人激励見送り式を氏神社で受けました。一旦家に帰り、最後の夜を明かし、九月一日午前、仏前に最後の別れを告げ、父、妻、兄と共に勤務先での見送り式を受けました。すぐ名古屋の自宅で壮行会の宴が行われて就寝。

二日午前七時三十分、名古屋陸軍病院正門前にて同行の父、妻、兄と開門を待つこと三十分、午前八時一

斉に開門し、待ち構えた大勢の応召者は吸い込まれるように入門、指定の場所に整列後、県別に分かれて身体検査へ向かう。番号順に厳密な検査が行われ、終わった者から指定の通路を進むと、右と左に通路が分かれ、その下士官に書類を渡すと、こちらへ行けと命ぜられた。一方の通路へ行くものは即日帰郷者であつた。

兵舎では一部屋五十人づつ、古びた軍服、袴下、雑糞が渡され軍服と着替える。もう帰れないと観念する。帯剣、地下足袋、巻脚絆が支給された。夕食が終つて明日の予定の説明といろいろの注意があり、就寝したが蚤が多くてなかなか眠れない。

最後の面会は三日午前九時より二時間許された。昼食後一時より出陣式のため営庭に整列、部隊長よりいろいろ訓示があつて、冷酒で乾盃。午後四時一切の準備が終つて病院を出発。一行二百人である。行先は知らされていないが武昌と感付いていた。

名古屋駅まで行軍して六時発の客車へ乗車、大阪、広島を経て下関で下車、直ちに乗船、釜山へ向かう。釜山港上陸後、三時間休憩して貨車にて武昌へ出発(深

夜)した。三度の食事は支給されたが、飲料水がなく、走行中の機関車から出る湯を少しづつ分け合つて飲み空腹を満たした。

潘陽駅で下車し陸軍の宿泊施設で一週間滞在して漢口へ向かう船を待った。奥地へ向かう歩兵部隊と共に九月十九日客船「東江丸」に乗船、揚子江を遡航する。昼は空襲が頻繁にあり上陸して林間にかくれ、日没後また乗船し夜間だけ遡航、四日後の二十二日午前漢口港に上陸、小型船で対岸の武昌に上陸、出迎への准尉に引率されて徒歩にて目的地の武昌陸軍病院へ行軍、五時に到着。

九月二十三日入隊式。四十度近い炎天下では地下足袋の裏より熱が伝わって直立不可能なくらい暑かつた。翌二十四日から毎日厳しい衛生兵教育が行われ、十二月二十六日に三カ月の教育が終わつて、私は伝染病棟勤務を命ぜられた。この病棟は本院より離れた所にある独立病棟である。軍医以下二十人の兵と五十人の看護婦で、常時二百人位のチフス患者の看護をした。伝染病棟で勤務する者は、常に目に見えない細菌と

の戦いで油断は出来ない。兵隊や看護婦が感染して病死した者も数名あった。

― 転 属 ―

北京で衛生材料廠が新設され、その要員として各地の病院から衛生兵が転属を命ぜられた。武昌陸軍病院からは二十人が選ばれ、私もその中に入った。六月十五日に貨物列車にて北京へ出発した。途中、度々空襲に遇い、列車を降り、木陰で待避して空襲をさけて、また進行する。一ヵ月かかってようやく七月十五日、北京に到着。翌日、勞務科に配属されて作業に従事した。

作業は毎日六キロ離れた駅で上海より貨車で運ばれて乗る一斗入りの硫酸液一本を二人で担って倉庫へ運ぶ仕事であった。硫酸が体にかかると衣服はポロポロに焦げ、皮膚はただれる。直ぐに水で洗わなければならない。時々匪賊に襲われ応戦したが戦死者も出た。

― 終 戦 ―

八月十五日夕方、使役を終えて帰隊すると、日本は敗戦だと聞かされたが信じられない。十六日正午、全

員整列して終戦の詔勅をラジオで聞いて張りつめていた気が抜けてしまった。部隊ではなすこともなく、ただ上官の命令を待つばかり。警備していた警備隊が本隊へ引き揚げたので、われわれが昼夜交替で部隊の警備に当る。十月上旬、材料廠は解廠となり、衛生兵全員は天津郊外の第五十四兵站病院へ転属を命ぜられた。

すでに病院は米軍に接收されて米軍の管理下であり、傷病兵の看護は、看護婦と衛生兵で看護していたが、十月二十日に看護婦は全員内地へ帰還したので、われわれだけで看護に従事、非常に忙しかった。

私は胸部疾患病棟で看護に従事したが、重傷者ばかりで夜も寝むれない。一日置きに病死者が出て、翌日遺骨拾いして私物と官給品と共に本部へ届ける。外地の病床で一人寂しく息を引き取った英霊の冥福を祈るばかりであった。

― 復 員 ―

昭和二十年十二月十日、待望の復員命令が出た。十二日患者全員を護送して秦皇島港の貨物船へ乗船して

出港を待った。十三日朝出港したがシケで難航し、十四日夕方、博多港へ入港した。途中死者が出て隊長以下全員参列して水葬したことは一生忘れられない。

十五日午前、船中で部隊解散式挙行。午後より下船して検疫後、米軍立合いのもと復員貨物列車に乘車し故郷へ向かう。午後五時の発車で途中大阪駅で客車に乗り替え、十六日午後五時、岐阜駅で下車。焼野原の市内を徒歩で七時間無事故郷へ復員しました。

妻は家出、年老いた父一人私の帰りを待っていました。想うに私は元気で復員しましたが多くの戦死者や、母国へ上陸前に船中で亡くなられた戦友を思う時、ほんとうに済まない思いで一杯です。ご冥福を祈りつつ暮しております。

服従を強いられた

中国四千余キロの道のり

岐阜県 安江 関一

日支事変の戦雲が色濃くなり、つづいて日米開戦とミリタリズムの激流は国内を戦場と化す態勢に押し進めた。男は戦闘帽にゲートル巻き、女はモンペ姿が日常の服装となり、この頃の人気者の中心はなんといても軍服姿であった。

「今の代は星（陸軍）に錨（海軍）に闇に顔」の諺が流行したことが記憶にある。闇物資も顔がなければ入手できなかつた。つづいて物資の欠乏は深刻となり、食糧や衣料の統制へと押し進み、「欲しがりません勝つまでは」「撃ちてし止まん」という合言葉が毎日のように繰り返された。戦雲渦巻く悲惨な若者の時代であった。

そうした国家存亡の秋、われわれは国の至上命令に